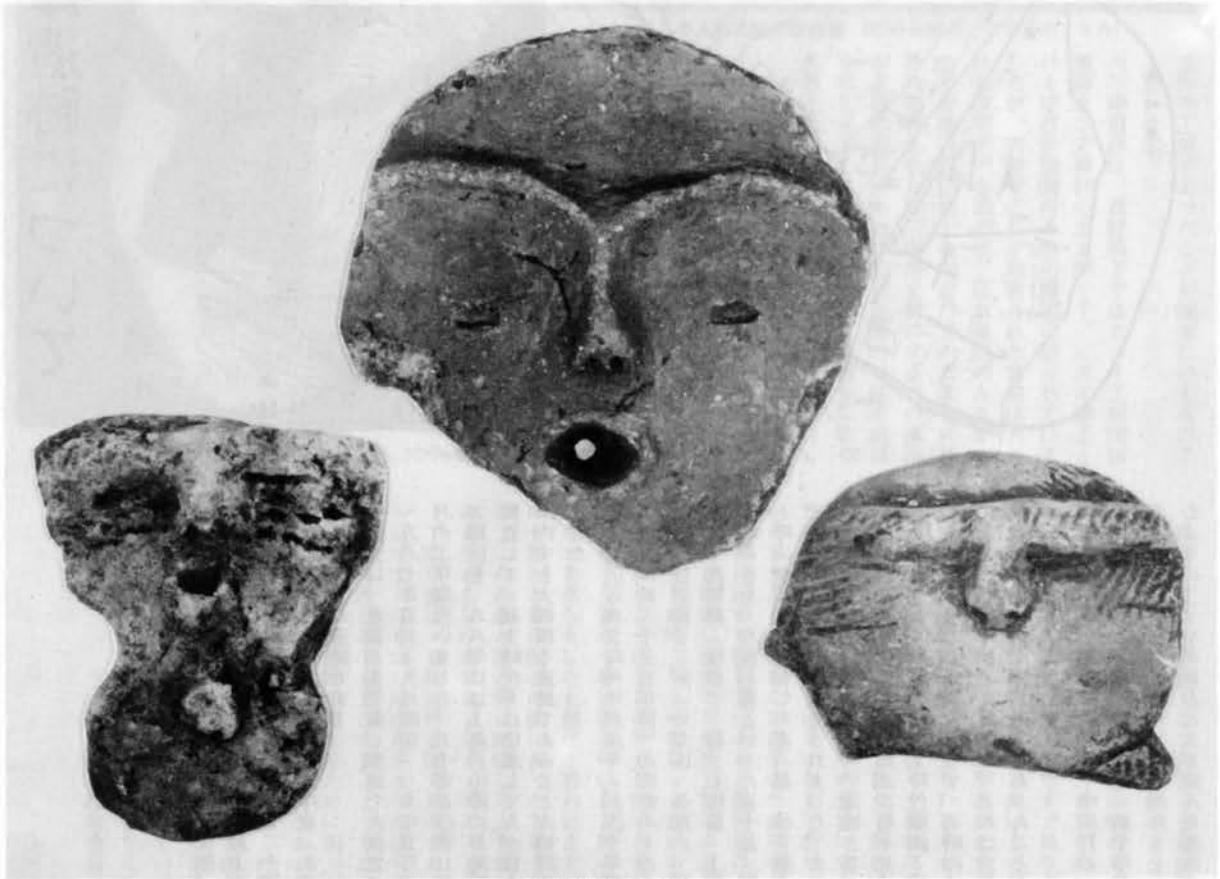


# 山と博物館

第34巻 第3号

1989年3月25日

大町山岳博物館



一津遺跡出土の土偶の顔

## 三千年前の顔

島田哲男

古代人の顔つきやその姿を知るのには、人骨からその姿を復元していくのが最もわかりやすく、確実な方法です。人骨というのは、この辺の地域では腐ってなくなってしまう土質であるので、出土することはほとんどありません。しかし、縄文時代の人々は自分達の姿を表現した土偶と呼ばれる、土の人形を残してくれました。土偶は、もともと全身がそろった女神像なのですが、それを壊して埋めることにより、作物・獲物の豊穡や生命の再生を願った祭りの道具です。だから完全な形で出て来ることはほとんどなく、顔・胸・手・足がバラバラにでて来ます。

土偶はこうした状態で出土しますが、当時の人の姿をそなえた人形で、ありのままを写し出しています。土偶は女の人を表現した女神像ですが、多くを並べて見ると、共通した基本の姿を知ることができます。

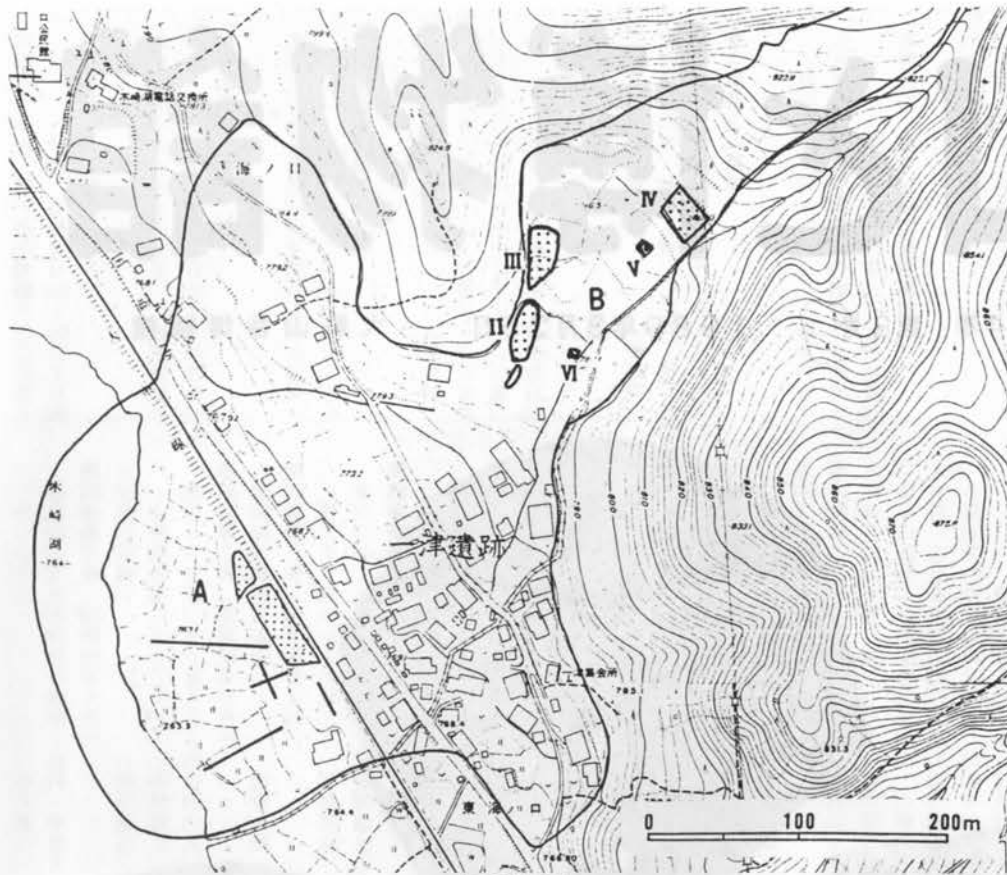
上の写真のように顔だけを並べて見ると、文様が入ったもの、文様がないものなどの違いはありますが、根本的には似かよっています。顔が全体的に広いこと、眉の部分が強く高くなっていること、鼻が高いこと、目が細いこと、口は丸い穴で受け口になっていることなどの共通点が見られます。

このような共通点は、同じ時代の人骨にも一致したものが観察できるといわれ、この当時の人々の顔つきは、広顔で眉間が突出しており、鼻根部がやや陥没した凸凹のある立体的な顔つきであったようです。

顔に文様のあるものはイレズミのような文様の化粧で、頭に髪型をあらわしているものもあります。また胸の部分や足に文様がきざまれているものは、服に描かれたデザインや服自体、くつなどです。このように土偶は当時の民俗をそのまま残した人形といえます。

## 海ノ口一津遺跡について

島田 哲男



一津遺跡地形図

一津遺跡は、大町市の木崎湖北端東側、湖に流れ込む一津沢が形成した小扇状地上のほぼ全面に広がる縄文時代(約一万二千三百年前)を通して、平安時代(中世(約千五百年前))の遺跡です。

調査は、農業基盤整備に関連した調査で、一九八七年五月～九月初旬、八八年五月～八月の二年間行いました。八七年には湖に近いA地区を、八八年には上部の山際のB地区を調査して、縄文時代をほぼ通して人が住んだ市内でも大規模な遺跡であることが確認されました。

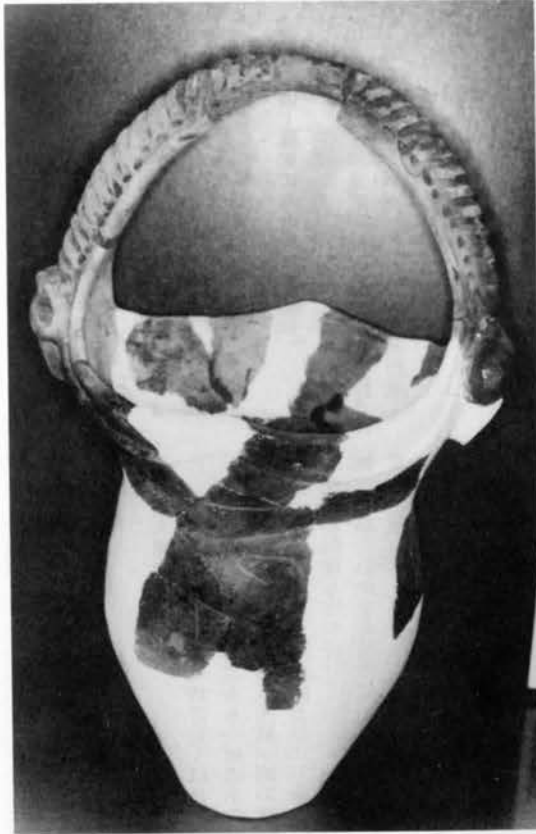
A地区は縄文時代中期後半(約四千年前)～晩期(約二千三百年前)の時期のものが主体で、住居跡十二軒(中期四・後期六・晩期二)、建物跡(後期)一棟、石棺墓・上部に石組みをもった配石墓といった墓十基、埋葬と呼ぶ甕に人を埋葬した墓八基、柱を建てたその根元三本などが発見されました。またA地区では湖に近いという条件で湿地となった部分が多く、黒色土の低湿地泥炭層が見られ、タイムカプセルのごとく縄文時代後期～晩期の木や木の実などが炭化もせず、当時の姿そのままの状態が出てきました。これは大変に貴重なケースで、湖が近くにあったことが幸いしたのだと思います。

B地区では、縄文時代早期～中期初め(八千～五千年前)、平安時代後半(約千年前)のものが主体で、湧き水が多い場所をとり囲むようにI～VIの地点に人が住んだ場所が見

つかりました。II区においてはその湧き水が集まって流れ、形成した小段丘の跡もみつかっています。遺構としては、縄文時代早期の集石、陥穴、前期初めの小堅穴、平安時代の住居跡7軒などが見つかると、II区の小段丘下では、当時ここがゴミ捨て場となっていたのか、中期初めの土器とともに滑石製の耳飾りやペンダントの未製品・製品がたくさん出てきました。

このようにA地区とB地区では同じ縄文時代でも年代が違ったものがでてきているのは、B地区のほうが古いものが多く、A地区はどちらかといえば新しくなることから、最初は山際のほうに住んでいて、それがだんだんと下へ降りて来たことを示しているのだと思います。これは、もしかしたら木崎湖の変化にも関係していたと思われるのですが、今のところその関係についてはわかっていません。

さて、A・B地区どちらにも関係する一津遺跡の特徴は、玉作りをやっていた遺跡だということです。B地区では、滑石を主にわずかながらヒスイを取り入れ玉作りを行ない、A地区においては、滑石、ヒスイ同様な比率で玉作りを行っていたようです。B地区では、ゴミ捨て場のような状態の場所から出てきたので、その加工についてははっきりしない点が多いのですが、A地区では、ヒスイ・滑石の原石・割ったクス・未製品などとともにハンマーや砥石が出てきているので、玉作りのほぼ七つ道具はそろっていることから、



吊り手土器



吊り手土器の出た配石墓 (石の右側のところから出てきた)

玉作り工房であったことが確実にいえるのだと思います。

一津遺跡は、長野県下ではヒスイ工房関係遺跡として最初の出土例です。ヒスイ加工といえは日本海側の糸魚川周辺に限られています。内陸でこれが発見された意義は大きいものです。今までは、日本海側の人々がヒスイを独占的に加工を行っていたように思われていましたが、水系を異にするこの遺跡がここに加わったわけで、今後のヒスイ流通を考えるうえにおいては重要な位置をしめるものと思います。

一津遺跡は、日本海と太平洋を結ぶルート上にあることから栄えた遺跡で、両者の交流物を交互に送り出していた流通センター的な役割をはたしていた遺跡だったのでしょう。今後、資料整理の進行に応じて、同じような遺跡との比較検討が必要であり、それが当時の流通を知る上で課題と考えます。

最後に、最近復元できた土器とB地区で出て来た陥し穴を紹介しておきます。

上の写真は、A地区の配石墓の横から、バラバラになっていたがまとまって出てきた吊り手土器と呼ばれる土器です。吊り手土器には、器の部分が浅いものと深いものがあり、浅いものは数多く発見例がありますが、深いものは中信地区で三例ぐらいしかなく、珍しいものです。吊り手の付く土器はだいたいの場合一津遺跡でも数が少なく、器の浅いものは神の火を灯す土器といわれています。しかし、深いものについては今まで数も少ないこともあり、何のためのものかは不明でした。器の部分を観察してみると外側にはススが付き、内側にはオコゲが残っています。どうも煮たきに使ったものらしく、浅いもののほうが古くからあることから、神の火を灯す道具の吊り手が、深い器に付いた、神に供えるものを煮たきした土器だと思われまます。この土器がお墓の配石の横にあったということ、これは、このお墓が神の祭に関係した人を葬つてあるのかもしれない。

下の写真は、B地区のⅡ区で発見された陥し穴です。これは、湧水の集まった流れが形成した小段丘のすぐ上にあり、どうも湧水の水を飲みに来る動物を捕えるために掘ったものです。陥し穴の底には小さい穴があいていますが、これは先を尖らせた杭を突っただ部分を上にして立てた穴で、確実に獲物を捕えるためのものでした。このように自然の条件と陥し穴がそろって見つかることも珍しいことで、狩りの方法の一端を私達に教えてくれました。(大町市教育委員会)



陥し穴



B地区Ⅱ区の小段丘  
(中央の上の細長く黒くなっているのが陥し穴)

# 博物館だより

## 平成元年度の企画展開催予定

来年度の企画展案がまとまりました。どうぞ米館くださいますようお願い申し上げます。開催期間などの変更は、本紙上でその都度お知らせします。

### 『世界の山―風見武秀山岳写真展―』

期間 4月23日(日)～5月21日(日)  
山岳写真家・風見武秀氏の撮影した秀作カラー写真約60点を展示。(通常料金)

### 『春の草花と山菜展』

期間 5月28日(日)～6月4日(日)  
恒例の企画展。鉢植え約二〇〇点、野の花の生け花約30点を展示。(入場無料)

### 『動物写生画展』

期間 6月18日(日)～6月25日(日)  
5月7日に大町市の小中学生を主な対象に開かれる『春の写生大会』で寄せられる全作品を展示する。(入場無料)

### 『日本板画院支部展』

期間 7月2日(日)～7月9日(日)  
長野支部会員作品50点を展示。(入場無料)

### 『日本山岳画協会展』

期間 7月23日(日)～8月27日(日)  
協会会員作品約50点を展示。(通常料金)

### 『秋の草花とキノコ展』

期間 9月30日(日)～10月2日(日)  
恒例の企画展。野の花の鉢植え二〇〇点・

生け花30点、キノコの液浸と生の標本各70点を展示。10月1日(日)にはキノコ鑑定会も予定している。(展示・鑑定会とも無料)

### 『夏期大学収蔵品展』

期間 10月29日(日)～11月12日(日)  
木崎湖畔の高台に講堂をもつ信濃木崎夏期大学は、大正6年の開講以来第一線の講師陣による広範囲にわたる講話を軸に、独特の教育活動の伝統を守り続けています。本展では、歴代講師の色紙や各種の収蔵資料を展示して、夏期大学の歩みをたどります。(通常料金)

### バックナンバーのお知らせ(9)

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、ご了承ください。

- 第27巻第12号(昭和57年12月) カワシンジユガイ 藤田 敬
- 第28巻第1号(昭和58年1月) 正月行事 荒井金重
- 第28巻第1号(昭和58年1月) 爺ヶ岳冷尾根 大町山の会
- 第28巻第2号(昭和58年2月) 仁科神明宮の棟札 上条為人
- 第28巻第2号(昭和58年2月) 木曾の柚 生駒勘七
- 第28巻第3号(昭和58年3月) 大町スキー場のローム層 平林照雄
- 第28巻第3号(昭和58年3月) 松崎紙の歴史と技術 白井 潤
- 第28巻第5号(昭和58年5月) 遠去かりて大いなる峯あり―古い山の人、中村清太郎のこと― 中村涼三
- 第28巻第7号(昭和58年7月) 山菜の季節に 清沢由之
- 第28巻第7号(昭和58年7月) 農具川による大町市の開発―古代・中世を軸にして― 小穴喜一

大町の人びとと私 小島隼太郎

第28巻第8号(昭和58年8月) 野草シリーズ 秋の草花 保尊裕之

大町市のフロラに新しく加わった植物 吉沢 健

第28巻第10号(昭和58年10月) 山の恩人・武田久吉博士 山崎安治

ことわざ歳時記 山蛭と味噌汁は 青木 治

第28巻第11号(昭和58年11月) 飼育ライチョウの産卵と抱卵 宮野典夫

ことわざ歳時記 南曇つたが、北窓あいた 嬉々天気だ稲刈らず(刈ろう) 青木 治

第28巻第12号(昭和58年12月) 市町村制と居住地呼称からみた 大町の方健

第29巻第1号(昭和59年1月) 大町の移り変わり 大日方健

松本盆地の風 袖山隼雄

ことわざ歳時記 嫁の小さいのは 青木 治

三代の不作 青木 治

第29巻第2号(昭和59年2月) 挿隆上人修行場跡を訪ねて 穂苅貞雄

ワカサギの穴釣り 長沢正彦

第29巻第3号(昭和59年3月) 登山ア・ラ・カルト 福与邦夫

春を迎える野ネズミたち 小林峯生

第29巻第4号(昭和59年4月) 信越文化の交流―千国街道を仲立ちとして― 田中欣一

第29巻第5号(昭和59年5月) 現状レポ 微生物の分類大系 丸山 晃

第29巻第6号(昭和59年6月) 西正院の大姥尊像 遠藤和子

野草シリーズ 野の花―薬草・毒草― 保尊裕之

第29巻第7号(昭和59年7月) 動物を追って 飯島正広

木崎湖の漁労今昔 西沢宗夫

第29巻第8号(昭和59年8月) 青少年と山 高橋伸行

日本最古の岩石 木船 清

第29巻第9号(昭和59年9月) 蛇類雑記 内藤 聡

万葉の人と植物(1) 丸山利雄

第29巻第10号(昭和59年10月) 大町の古代人の生活 篠崎健一郎

万葉の人と植物(2) 丸山利雄

第29巻第11号(昭和59年11月) 山の文学者 深田久弥さん 丸山 彰

カモシカの角と年齢 三浦慎悟

第29巻第12号(昭和59年12月) ノルウェー極地研究所 太田昌秀

お焚き上げ 白井 潤

(次回につづく)

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありませんら、一部100円でおわけします。巻号と部数を明記のうえ、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛ご送金ください。着信次第お送りします。送料当方負担)品切れの折は最新号でお知らせします。振替の場合、口座番号は長野四一―三二九三です。

山と博物館 第34巻 第3号

一九八九年三月二十五日発行

発行所 長野県大町市 TEL220-211

印刷所 大町山岳博物館

定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号(長野四一)三二九三